

猛のクラスではもっと卑猥な姿になる。ブラウスのボタンを順にはずすと小夜子の前がはだけられる。ハーフカップブラが露出した。ブラウスを脱ぎさると、そのブラをはずした。

「もう立っているじゃない」

松川伊代が小夜子の乳首を指ではじいた。指摘されるとおり、小夜子は乳首を固く尖らせていた。恥ずかしい。恥ずかしい思いがさらに小夜子の軀を熱くさせる。タイトミニのサイドファスナーを下した。臀部からスカートを下していく。窮屈そうに臀部を降りるスカートは足もとで輪になった。足首を抜くと小夜子はパンティー一枚とヒールの姿になる。尻肉が完全に見える。後ろは紐状のパンティで、恥部を覆う三角布は極端に面積の小さなものだ。その三角の布は遠目にも濡れていた。

「オシッコでも洩らしたのかしら？ぐっしょりだわ」

渡瀬由紀がパンティの中心部が濡れていることをからかう。

「先生、この染みはオシッコですか？」

伊代が指で小夜子の恥部を軽く突いた。小夜子の腰が後ろに引ける。

「…違うわ」

小夜子は伊代に視線を向けた。金髪の少女は

「それじゃあどうして濡れているのよ？」

とさらに指でやや強めに突いてくる。

二人の少女が女教師を辱める構図だ。その光景を猛は煙草を吸いながら眺める。猛の子分もにやにやししながら楽しむ。他の生徒たちも女教師が恥辱にまみれる姿に期待していた。

「…それは…先生の愛液よ」

「愛液？愛液って何ですか。説明していただけませんか？」

由紀がむき出しの乳首をつまんでいじりだした。

小夜子は、伊代から視線をはずすと、乳首をつまんでいる由紀に顔を向けた。

「知っているでしょ」

「いいえ、知りません。愛液って何なのか、教えてください」

「・・・膣分泌液のことよ。女性が性的に興奮すると分泌される体液のことよ。」

「なあーんだ。マン汁のことですか。愛液だなんて上品な言い方をするからわかりませんでしたよ。先生、マン汁でそんなに濡らしているんだ。いやらしいわね」

由紀がクスッと笑う。笑いながら乳首をこりこりと刺激している。小夜子は電流が走ったような感覚に、悩ましげに腰をくねらせる。

「ふーん、性的に興奮ですか。先生は性的に興奮するようなことをしたのかしら？」

伊代の指がパンティの中心部に強く押し付けられてくる。膣口にパンティ越しに指先がぐりぐりともぐりこむ。小夜子は口を結んでいなければあえぎ声をもらすところだ。

「・・・」

小夜子はくびれた腰をよじらせながらうつむいた。その顔

を由紀があごに指をかけてあげさせる。

「教えてよ」

由紀の指が乳首を強くつまんだ。ねじ切るように指先の力をこめる。小夜子の美しい顔が痛みにゆがむ。眉間をよせて耐えるのだ。

「…他のクラスでパンティを見せました」

「それだけなの」

「…はい、それだけです」

小夜子はこくりとうなずく。艶やかな髪がはらりとたれて、美貌の顔にかかる。

「パンティを見せただけで性的に興奮したのかしら。こんなにぐっしょりに濡らしたのかしら」

「…はい」

執拗な言葉なぶりに小夜子は消え入りそうな声で答える。

「パンティを見せて性的に興奮することをなんていうか知っているかしら」

伊代の指先がパンティにかかり、引いては離す。パンティ

のゴムが下腹部をうつ。その音がかすかに響く。

「…露出症です」

小夜子は苦しそうに答えた。教え子たちに嘲笑が浮かんでいる。女教師が教室で自分は露出症だと宣言したのだ。この教室で、小夜子はストリップをした。尻肉を叩かれた。猛の女であることをあからさまにされた。しかし同性の少女の粘性の騷り方は、小夜子の心の深部までえぐってくる。ねちねちと羞恥責めにされる小夜子は、心を乱さないではおれない。

「先生は露出症なのね」

由紀が念をおす。

「…はい、露出症です」

「もっと大きな声で言いなさいよ。深津小夜子は露出症の変態女ですってさ」

由紀の指が恥辱感で顔を火照らせている小夜子の額をつんと突いた。

「早く言いなさい！」

伊代が紐状のパンティが食い込むむき出しの尻肉を容赦なく叩く。

目の前で繰り広げられるレズ責めを生徒達は堪能した。男子生徒はすでに股間を痛いほどに固くさせている。女子生徒達はにやにやしながら美しい教師が恥辱にまみれ苦しむ姿を楽しむ。

「・・・深津小夜子は・・・露出症の・・・へ、変態女です」

哄笑がもれた。きれいな顔にもみじ色が浮かんでいる。その姿が生徒たちをかきたてる。もっと惨めに墮としてやりたいと思うのだ。

「深津小夜子は、パンティを見せながらおまんこをぐっしより濡らしましたって言いな！」

由紀が乳房を平手打ちした。

「・・・深津小夜子は、パンティを見せながら・・・おまんこをぐっしより濡らしました」

小夜子は命じられた言葉を教え子たちに向かって吐いた。

「それじゃあ、ぐっしよりになったまんこを見てくださいい

って自分からお願いしなよ！」

少女たちは容赦がない。どこまでも加虐的に小夜子を追い込んでいく。

「ぐっしょりになったおまんこを見てください」

小夜子は美しい顔を朱に染めながらパンティに手をかけた。ためらいが浮かぶとすかさず伊代が臀部を叩く。由紀が乳房を叩く。小夜子は極小のパンティを脱ぎさった。

「あきれたものね。これでも教師なの」

「すごい濡れ方だわ」

伊代と由紀が笑いだす。つられて生徒たちも笑う。嘲笑につつまれた小夜子は全裸でたたずむしかなかった。小夜子の股間は恥毛まで濡れそぼっている。媚肉の合わせ目からは粘液が糸を引いていた。浅ましい姿だった。

「中はどうかしら？おまんこの中まで見てほしいよね。先生は露出症なんだから」

伊代が何度も叩いた臀部を今度はやさしく撫でている。

「自分の指で開くのよ！」

由紀が乳首をつまんでひねる。

「…先生の…おまんこの中まで見てください」

小夜子は指を使った。細い指で媚肉を開いたのだ。淡い色素の濡れ光る女の粘膜が露呈する。

「腰を突き出してくださいよ」

椅子に座っている男子生徒から要求が出る。

小夜子は腰を前につきだした。

「こ、これでいいかしら？」

声は震えている。それでも恥部を剥き出した指をはずすこととはない。